「フランス十九世紀の美術批評研究」『研究報告集』 日本フランス語フランス文学会中部支部 1993年 17号 pp.83-84.
ISSN 0285-3795

日本フランス語フランス文学会　中部支部

研　究　報　告　集

N° 17

Bulletin Annuel
de la Société de Langue et Littérature
Françaises du Chûbu

1993

研究現状シリーズ

フランス19世紀の美術批評研究

三重大学　稲　賀　繁　美

最近十年のフランス19世紀文学・美術研究において，美術批評研究はもっとも顕著な進展が見られる研究分野のひとつであろう．本報告では，（Ⅰ）まずこうした研究の隆盛の背景，（Ⅱ）ついで最近十年の主要な動向，（Ⅲ）最後に現時点における将来の展望―研究方向の予測―を簡単に報告した．

（Ⅰ）　まず，研究進展の背景としては，(1) 美術史研究における révisionnisme の影響，つまり70年代までのように発展史観に則って，新古典派，ロマン派，写実派，印象派，および象徴派といった定説の系譜を代表する画家，ないしかれらを擁護した代表的作家のみを優先するのではなく，むしろ当時の社会的動向に忠実に，当時の視点に密着して状況を再現しようとする機運，(2) 有名作家・画家食いつぶしに伴なう研究対象選択上の転進，つまりアカデミー系の忘れられた偉人や20世紀初頭以来地獄行きとなった画家たちを落ち穂拾いすることで，研究の場に新たな象徴的市場の構築（ないし穴場狙い）を試る傾向，(3) 構造主義の遺産としての表象制度批判，つまり言語と絵画表象との一対一対応が徐々に崩れてゆく歴史的局面を経験した危機の時代たる19世紀を，文学と美術の研究境界領域と見定め，素朴実証主義の彼方でこれを特権的実験場として研究する姿勢，の三点を指摘した．

（Ⅱ）　ついで (1) 1980年までの主要な美術批評研究を批判的に一覧し，この段階ではかたや著名な文学者の傑作絵画なり有名画家なりへの言及を言祝ぐ文学研究か，さもなくば近代主義的な視野の下で話題とされた絵画作品，画家に対する所謂 fortune critique に終始する美術史研究かに分岐したまま自足する傾向のあったことを指摘し，(2) ついでその後数年間で社会史的視点の導入が状況を一変し，一次資料検索の基本的レフェランスとなる

bibliographies編纂がF. Haskell指揮の下のケンブリッジで進行し，またフランス本国の国家博士論文でも方法論（J.-P. Bouillon, J.-P. Guillerm）実証的文書発掘（B. Foucart, P. Vaisse）両面において画期的成果があげられはじめ，また当時の批評を出版可能な範囲内で集大成したアンソロジー（D. Riout, J.-P. Bouillon編など）のみならず，既存研究領域の枠を越えた幾多の論文集が編まれ始めた（U. Finke, J.-P. Bouillon, J.-P. Guillerm, Ph. Delaveau編など）ことを，主要業績を批判的に検討・分析しつつ紹介し，(3) 最後に関連領域における重要な研究成果をいくつか列挙するとともに（Ph. Junod, H. & C. White, A. Becq），あわせて該当する分野の（ゲルマン系を含む）古典的業績をも確認した（必要なbibliographieは当日配布のプリントに譲りここでは割愛する）．

（Ⅲ） 以上を受けて現状を顧れば，注目されるのは (1) まずD. GamboniのO. Redon研究における言説と絵画表象との葛藤：*La Plume et le pinceau* 1989，(2) N. HeinichのLa Gloire de van Gogh 1991による天才創出と受容の社会学的・人間学的考察，(3) およびこれらの背後にいるP. Bourdieuによる象徴的財の革命に関するテーゼ *Les Règles de l'art* 1992であろう．これら三研究に直接依拠する代りに，今回の報告ではこれら三つの位相に対応する具体例を報告者自身の研究から手短かに取り上げた．まず (1) 言説と絵画表象との葛藤については，マラルメがマネの絵画を擁護した際の（英文しか残存しない）1876年のテクストの意味論上の倒錯を指摘し（岩波書店『20世紀の芸術』第一巻 1989 拙稿参照），またガンボーニの仮説への補強証拠として，ルドンの《カリバンの眠り》（オルセー美術館）の知られざる文学源泉の指摘（通説のシェイクスピアでなくエルンスト・ルナンの戯曲）とそれを裏切るルドンの戦略分析（由良君美還暦記念論集『文化のモザイック』1989 拙稿），(2) ゴッホ受容に関しては木下長宏の業績を批判的に利用した日本の場合の特異性の指摘（『ユリイカ』'90年12年号拙稿），(3) 最後にブルデューの謂う象徴的革命のモデル・ケースとして，クールベの政治的絵画《法話の帰り道》(1863年) 損壊・消滅事件（『日仏美術学会報』9号，1989）の3つのケース・スタディを試みた．この延長上に今後の美術批評研究の方向を見定めたい．

編集後記

『研究報告集』第17号をお届け致します．今回の報告集も前回に劣らず充実した姿でお届けできることを会員の皆様と共に喜びたいと思います．特に大会の開催校の中京大学，岐阜大学の関係者に心からお礼を申上げます．岐阜大学ではStéphane Feuillas氏がアンリ・ミシューについて示唆に富む明解な講演をして下さったことに心から感謝します．又稲賀繁美氏の19世紀美術批評研究の現状についての報告は文学以外の分野に及んで殆んど画期的と言ってよく，今後の支部活動の学際的方向を示唆して興味深いものがあります．この種の発表が増えれば支部活動に一層の深みが増すものと期待されます．この点でも支部会員全員の創意・努力を切望致します．

（神沢 記）

編集委員　滝沢隆幸　小柳公代
神沢栄三　植田裕志

日本フランス語フランス文学会中部支部

平成5年(1993) 3月　発行

研究報告集　N°17

編集代表者　神沢栄三

日本フランス語フランス文学会中部支部
事務局：〒464-01　名古屋市千種区不老町
名古屋大学文学部仏文研究室
TEL (052) 781-5111　内線 2248
振替口座　名古屋5-38493

印刷所　有限会社　三愛企画
〒441-11　豊橋市東森岡1丁目2-5
TEL (0532) 88-0556 (代)